戦争と平和の資料館
ピースあいちニュース
第30号
2018年12月1日発行
〒465-0091
愛知県名古屋市名東区
よもぎ台2丁目820
電話・FAX 052-602-4222
発行:戦争と平和の資料館ピースあいち　http://peace-aichi.com/　【定価:30円】

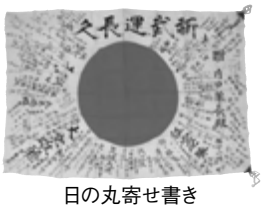
2018年 第6回寄贈品展 時代を超えて語り継ぐモノたち

12月8日(土)～2019年1月19日(土)

ピースあいち第6回寄贈品展「時代を超えて語り継ぐモノたち」が12月8日から始まります。この一年程の間に寄贈された154点が展示されます。展示品はそのモノとしての価値はもちろんですが、それが存在した当時の政治、生活、戦況などを伝えてくれるモノでもあります。

満州関係の紙資料が多くありますが、その中には開拓に希望を持って渡満したのに兵隊にとられ戦死した記録があります。本人の無念さはもちろん、残った開拓団の方のその後の悲痛の声が聞こえてきそうな資料です。一方、瀋陽など都会に住んでおられた方の資料からは、日本への引き揚げが組織的で秩序だって行われていたように見えます。しかし、引揚者の名簿には乳飲み子を含む37名が記されており、劣悪な環境のなか、帰路の大変な状況が想像できます。この寄贈品展が反戦を心に留める機会にできればと思います。

出征時ののぼり旗



日の丸寄せ書き

写真(高見連区出征軍遺家族慰安会)

戦闘機用毛皮帽子

露営蚊帳

東京日日新聞 1936年8月15日
ベルリンオリンピックの記事

《準常設展》「戦争の中の子どもたち」展

2018年10月2日(火)～12月1日(土)
2019年1月22日(火)～2月23日(土)

戦時中の学校や家庭での日々の暮らしを紹介し、子どもたちが「戦争と平和」について考えるきっかけにしてほしいと願う展示です。

70年以上も前の戦争の時代は、子どもたちにとっては遠い昔のほとんど知らない世界です。加えて、戦争の生々しい話ができる戦争体験者が年ごとに減り、子どもたちに直接、戦争について話すことのできる人も少なくなってきました。

展示ではこうしたことを考えながら、子どもたちに戦争の時代の雰囲気をいかに伝え、普通の人たちが戦争に巻き込まれていく恐ろしさを感じてもらえるかを考えながら企画しました。70年以上続いてきた平和を守っていくためにはどうすれば良いのかも合わせて考えていただければ幸いです。

《企画展》
「熱田空襲」
～愛知時計電機・愛知航空機～(仮)
2019年3月5日(火)～5月5日(日)

1945年6月9日、熱田神宮に近い愛知時計電機と愛知航空機の2つの工場一帯を襲った「熱田空襲」では、たった8分間の空爆で2,000人を超える犠牲者を出しました。なぜこんなに被害が大きかったのか。その理由をさまざまな角度から解明します。また「熱田空襲を語り継ぐ」をテーマに、東邦高校美術科の生徒の作品、体験者の残した絵日記、語り手のビデオなども紹介します。

特別企画展 高校生が描くヒロシマと丸木位里・俊「原爆の図」（7月24日（火）～9月2日（日））を終えて

昨年の夏休みに広島で百数十点にも及ぶ全作品の展示を見て以来、基町高校の「原爆の絵」の原画を「ピースあいち」にと切望し、この夏に実現できたことを本当に嬉しく思います。この作品群は、美術を学ぶ高校生と被爆体験者が一対一のペアを作って面談を重ね、一年をかけて一枚の「原爆の絵」を描き上げるという、広島平和記念資料館のプロジェクトとして生まれたものです。

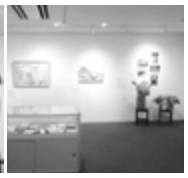
夏休みの来場者は親子連れや小中学生が多く、今まで見たことのないシーンの連続に息をのみ、絵の前で長い間立ち尽くす姿も見られました。今年で4回目となる丸木夫妻の原爆の図「第11部《母子像》」と並べて展示された10点の絵は、多感な高校生という描き手の感性を通して、73年前の被爆体験の実相を改めて私たちに訴えかけてくれました。

会期が始まって最初の週末には、今年絵を完成させたばかりの高校3年生、今は大学院生となった卒業生、指導した先生の3人を招き、丸木美術館の岡村幸宣学芸員も交えたトークを行いました。

岡村さんは、「被爆者の体験を聞き、絵画として可視化させるという試みは、丸木夫妻の《原爆の図》とも重なる。この取り組みは、消失する過去を再現できるのか、という絵画の本質を考える試みになっている」と評価されました。「絵画は想像力によって、いつ、どこにでも自由に飛んでいくことができる。仮定の現実を積み重ねながら、それぞれの戦争体験を立ち上げることが〈記憶〉するという行為で、非当事者がその行為を繰り返しながら次の他者へと受け渡していくのが〈継承〉なのではないか」と、貴重な提言をいただきました。

peace nine 2018展

9月11日（火）～9月29日（土）



名古屋芸術大学の学生、OB、教師などによる「平和」をテーマにした美術展。「ピースあいち」では2012年から開催しています。今回は作品制作にあたっての勉強会を「ピースあいち」と合同で開催、また「アーティストトーク」（9月15日）では若いアーティストたちがそれぞれの言葉で作品の背景や平和についての考えを語りました。

歌は素晴らしい ピースコンサート

9月16日（日）

毎年恒例になっている名古屋二期会アンサンブル研究会の「ピースコンサート」が60人を超える参加者を集めて行われました。日本の歌6曲、外国の歌3曲、『オペラアリア』5曲、動物の歌8曲をノーマイクで2時間熱唱されました。被り物や小道具を使った動物の歌では会場が盛り上がりました。最後に『赤とんぼ』を会場全員で合唱し、盛会のうちに終わりました。

「語り継ぎ手の会（リボン）」第三回例会の開催

10月20日（土）

1階交流スペースでリボンの第三回例会が開かれ、会員14名と事務局員等11名の計25名の出席がありました。宮原大輔館長からの、次世代による戦争体験伝承活動への期待を込めた挨拶の後、リボン代表の中村桂子さんの司会で進行しました。

河原忠弘事務局長から、会結成以来一年間の経過報告がありました。現在の会員数は46名で、7月の椙山女学園高校での愛知サマーセミナー、8月の館恒例の「戦争体験を聞く会」でのリボンの会員の活躍ぶり、それらにつき新聞・テレビで報じられたこと、が報告されました。また、その経験の反省と課題のまとめがありました。さらに、リボンの今後の活動に際しての基本的申し合わせをし、当面の活動についての確認をしました。

最後にサマーセミナーに出演した石川薫さんによる、杉山千佐子さんの「名古屋空襲で失ったもの」の再演があり、映像を組み込んだシナリオや発表の仕方を学びました。全員が意見・感想を述べあうなど充実した例会となりました。

名古屋市平和都市宣言

「愛知・名古屋戦争に関する資料館」が中区大津橋の地に開設されたのは2015年のことです。1階展示室の奥のコーナーには、「平和県宣言」と「名古屋市平和都市宣言」が掲示されています。名古屋市の宣言は以下のものです。

「世界恒久の平和を希求し、子孫に恵沢を確保するのは全人類の悲願であり、われらが戦争を永遠に放棄したのも、この人類普遍の原理に由来する。名古屋市は、原水爆の脅威から免れ、全人類の平和と幸福を熱望する全世界の人々と相より相扶けて、人類永遠の平和確立のため努力する。右宣言する。昭和三十八年九月十八日　名古屋市会」

市議会の議事録に依れば、提案者には民社党の渡辺義信議員をはじめ自民、社会、公明の議員14名が名を連ねています。提案者を代表して小出善三郎議員が提案理由として、平和への熱い思いを語っています。その大要は次の通りです。「わが国は全世界でただ一つの原爆による洗礼を受けた国であり、もう二度と再びあの悲しい人類相互の歴史は繰り返したくはない。この願いをこめて、この平和都市宣言を提案した」。

なお、「平和県宣言」は次の通りです。

「戦争のない世界、原水爆脅威のない世界は、全人類の悲願である。愛知県は全世界の人々と手を携えて人類永遠の平和と幸福実現のために努力する平和県であることを宣言する。昭和三十八年九月三十日　愛知県議会」　（S）

ピースあいちチャリティーライブ「音楽の力 古橋とゆかいな仲間たち」

11月4日（日）

ボーカルスクールインストラクターの古橋庄平さんが、「音楽の力を世の中のために役立てたい」と、2015年から年に1回開催しているチャリティーライブ。今年の寄付先に「ピースあいち」を選んでくださいました。3時間半におよぶライブはヒット曲20曲を生演奏でカバー。出演者・来場者は合わせて171名。「ピースあいち」のPRタイムもあり、311,673円のご寄付をいただきました。

ピースあいち「学生の日」—ピースあいちで平和と向き合う

11月18日（日）

「ピースあいち」に気楽に来てもらいたいと、若手ボランティアの次世代交流チームが企画した日曜開館・学生入館無料の日。高校生、大学生、一般の方まで、誘い合わせて来館してくださいました。名古屋空襲をテーマにしたマンガ『あとかたの街』の舞台をチームで歩いた記録も展示。ゆっくりと館内を見てもらい、お茶をしながら平和や戦争の話をして、有意義な時間を過ごしました。

夏の戦争体験語りシリーズ2018

ことしも「戦争体験語りシリーズ」が、8月1日から15日まで開かれました。話を聞かせていただいたのは、最高齢94歳の男性を含む「ピースあいち語り手の会」「語り継ぎ手の会」の12人。今では想像もつかない体験談に、あらためて平和の尊さを思いました。
（語りのまとめはボランティアがしました。字数の関係で一部文章が短くしてあります。語り手の年齢は開催時のもの）

8月1日（水）

通信隊について戦史から記録を抹殺

鈴木　忠男さん（92歳）

陸軍特殊情報部隊北多摩通信所通信傍受兵として勤務していた鈴木さん（当時19歳）は、まず、2011年8月にNHKスペシャルで放映された「原爆投下・活かされなかった秘密情報」を紹介された。

8月6日・9日、日本軍情報部隊はテニアン島における米軍の動きを知りながら、空襲警報を出さず、原爆は無防備の状態にあった広島・長崎市民の頭上に投下された。もし警報が出されていたらあのように多数の犠牲者が出ずに済んだのではないかと思うと残念です、と語られた。当時、鈴木さんはこれらの通信の傍受に携わっていました。原爆投下後の8月10日から14日までに証拠資料、機材の焼却、焼却後の灰も処分するように厳命がありました。除隊時、憲兵より、通信隊については場所・業務内容等一切口外することを禁じられたそうです。

8月2日（木）

旧満州・奉天市における戦中戦後の生活体験

松下　哲子さん（84歳）

奉天で生まれ育ちました。昭和20年8月初め、「ソ連軍が攻めてくる!」と言われ、平壌に疎開、終戦をむかえました。8月末に奉天に戻りましたが、ソ連兵でいっぱいでした。酔っぱらって銃を空に向けて撃つことも。明日はどうなるか分からない、今日を生きることだけで精一杯でした。そんな中で、発疹チフスが発生し、周りの人がバタバタと亡くなっていきました。広場に穴を掘り、その中に遺体を放り込む。その時の死臭は、今も忘れられません。21年8月、妹の遺骨を持ち、弟の手を引いて佐世保に帰ってきました。

若い人たちに言いたいことは、侵略してそこに住みつこうとせず、世界の人たちと仲良くしていってほしいということです。

8月3日（金）

岡崎空襲と勤労動員

加藤　照さん（87歳）

1945年、15歳で学徒勤労動員。配属先は三菱重工戸崎工場、任務は重爆撃機「飛龍」の胴体の鋲打ち。作業員の中に囚人がいて驚いた。工場で使用すべき部品が来なくて機体組み立て作業ができないとき、防空壕作りや飛行場にしていた競馬場へトロッコで土を運ぶ土方作業などを行った。空襲警報があると蛸壺壕（深さ2m）に避難した。

1945年7月20日未明、約80分間の空襲。焼夷弾の落下音や敵爆撃機の飛行音が恐ろしかった。火災地域から火の粉が降ってくるため、田畑がある方へ懸命に逃げた。夜が明けたら一面の焼け野原。実家は丸焼けになったが家族は無事だった。岡崎空襲の死者は280人、被災者は32000人。

8月4日（土）

10歳の少女が体験した戦中・戦後

高橋　みな子さん（83歳）

豊橋で少女時代を過ごした。真珠湾攻撃の前日12月7日、豊橋は大地震があり、終戦の年の大空襲でわが家は跡形もなく焼けていた。

イナゴを捕って学校へ行き、みんなで食べた。農家の人が食べている芋が羨ましかった。身体には蚤（のみ）シラミがつき、酢で駆除していた。そんなことでよくイジメられた。

満州へ渡った叔母は引き揚げの時、ソ連兵から身を守るため頭を坊主にして男のようにして帰ってきた。母の弟は学徒動員で中国へ行ったが、終戦後シベリアへ抑留され、2年後に帰ってきた。帰った時、母と伯父は道端で抱き合って泣いた。それは映画のシーンのようだった。もう一人の叔父は中国へ行ったが、帰った後で精神を病んだ。その娘は精神科医になった。

8月5日（日）

広島で被爆

木下　冨枝さん（82歳）

1945年8月6日午前8時15分、広島市内の自宅で教科書を読んでいる時被爆した。爆心地から1.2km。外へ出ると街はすっかり無くなっていた。姉は走って戻ってきたが背中の服が燃えていた。家族で逃げる途中「黒い雨」を浴びた。家の下敷きになって助けを求める人を助けることもできなかった。多くの人が水を求めて川で息絶えていった。川は死体で埋めつくされ、水を飲むこともできなかった。

しかし、戦争を早く終わらせるために一般人を大量に無差別に殺傷することは絶対許されない。我が子にも放射能の後遺症や差別を恐れ、隠してきたが、次世代にこの悲惨・地獄図を語り継いでいく必要を感じた。二度と核兵器を使わせてはいけないと決意し、こうして皆様にお話している。

8月7日（火）

5月17日の名古屋空襲

澄谷　三八子さん（80歳）

当時熱田区に住む。5月17日、焼夷弾の降る中、兄10歳、弟5歳、2歳の弟を背負った母と防空壕に入る。以前から空襲があり、すぐに行動できるよう、寝る時も服を着たままだった。危険が迫ってきたために外へ出る。前の川に舟が何艘かあり、引き潮に合わせタイミングよく乗る。火除けに薄い布団を被って下の子を背負っていたが、その子は火の粉を浴びて眉が焦げていた。初めて喋った言葉が「あつい」だった。次の日、家があった場所を探しに行く。父と再会。その後、東海市へ。

2学期になり、着ていく服がなく、母が父の服を直してピンクのボタンをつけてくれたが、いじめられた。その時の先生がやさしかったので、先生になろうと一生懸命頑張った。戦争は絶対あってはならない。

8月9日（木）

父が語った悪魔の731部隊

神谷　則明さん（68歳）

先の戦争で関東軍の731部隊に属していた父上のお話でした。

父上は、731部隊の蛮行を「口外するな」という軍隊からの命令で、戦後50年もの長きにわたり、それを封印していました。しかし書籍の出版などで世に知られるようになり、父上も沈黙を破り、語りはじめました。それを聞いてきた神谷さんも、父上の遺志を受け継がねばとの強い思いで、1994年から語り部として活躍しています。その内容は731部隊の実情を軸に、過去の戦争の姿を深く掘り下げています。それは同時に平和の大切さ尊さを考えさせるものでもあります。そんな意味で、今日も若い人たちの参加が多かったことは、意義深く、嬉しく思いました。

8月10日（金）

父・勝廣の沖縄戦

中村　桂子さん（65歳）

父・勝廣は1944（昭和19）年8月に中国戦線から沖縄に移動しました。1945年4月嘉数（かかず）高地の戦いに際して、戦車への体当り攻撃を指揮しました。体当りした部下たちが粉々になって死んでいくのに衝撃を受けました。自らも右腕を負傷し、糸数アブチラガマに収容されました。さらに破傷風にかかり、九分九厘、生き残る可能性がない状態でしたが、奇跡的に生き延びました。

父にとって戦争による悲惨は死ぬまで続きました。「僕だけが生きて悪かった」「どうしてあんなに人を殺したのだろう」。毎晩うなされていました。父は毎年沖縄に供養に行っていました。そして、「今度生まれるときは平和の時代に生まれたい」「戦争が始まったら逃げなさい」の言葉を遺しました。

15歳の語り継ぐ戦争「金城学院中学生の壁新聞」

7月24日（火）～9月2日（土）　2階プチギャラリー

「毎年の金城中学の取り組みにも感心しました。（63歳男）」と来館者アンケートによせられたこの展示。広島への修学旅行のフィールドワーク、語り手のお話、祖父母の体験を一人ひとりが一枚の壁新聞にまとめました。

“平和をつくる人になる”という金城学院中学生の思いに溢れる作品が並びました。

8月11日（土）

おじいちゃん戦争の話を聞かせて下さい

乳井　貴さん
野間　宏さん

90歳のおじいちゃんが10歳の孫の八木湧太郎君に語った戦争の話です。後に本になりました。それを、おじいちゃんと孫に当たる年齢の2人が朗読しました。

おじいちゃんは20歳の時に徴兵検査を受け、フィリピンでパイロットに天気を教える仕事をしていた。アメリカ軍の攻撃がひどくなったのでジャングルの山の中へ入った。食糧がなくなったら、デンデン虫、ミミズ、なめくじ、ゴキブリ、野ねずみ、ヘビを食べた。8月15日は日本はまだ戦っていると思っていた。敗残兵狩に見つかり捕虜生活。昭和21年11月、永川丸で名古屋へ引き揚げ。300円（当時みかん一盛30円）と軍服、オーバー、切符をもらった。おじいちゃん死なないでくれてありがとう。おじいちゃんがいたからぼくがいる。

8月12日（日）

非国民と罵られたサイパン島帰りの少年

目崎　久男さん（85歳）

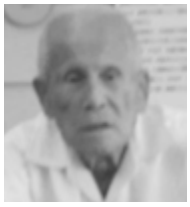
1940年サイパン島では、「日本は近々アメリカやイギリスと戦争になる。民間人は内地へ帰るように」というのが常識でした。12月末東京に帰り、麹町小学校2年に転入。学校で、「アメリカやイギリスと戦争になる」などと話していたことが“特高”に知られ、父は逮捕、勾留されました。玄関の脇や塀には、「非国民の家」「スパイ」の落書きやビラ。学校では、私は「スパイの子」。担任の先生からも口に赤いテープを×に貼られ「非国民」と罵（ののし）られました。

1941年夏、私たちは名古屋市に引っ越しました。12月8日に始まった太平洋戦争は、1945年8月15日敗戦。その夜、暗闇の中でキラめく電灯の光が、私には「明るい未来の希望」のように思えたのでした。

8月14日（火）

寒さと飢えに苦しんだシベリア抑留

河村　廣康さん（94歳）



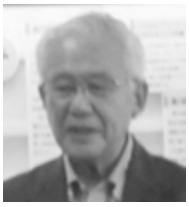
春日井の生まれ。1944年関東軍に入隊、翌年瀋陽（昔の奉天）で終戦を迎えた。8月15日武装解除された。その後捕虜となり、シベリアへ。バイカル湖の西タイセットから40キロ北の第4収容所に入れられた。収容所はバラックで寒かった。だいたい5℃くらい。電灯・ペチカも一個だけ。着替えもなく、不衛生で、発疹チフスが流行って亡くなった人も多い。二人で松の木を一日3本切って枕木を作るのがノルマ。食事は黒パン一切れくらい。おかずはバイカル湖の魚で、腐った匂いがした。

栄養失調でバタバタ人が亡くなった。私の戦友も夕食時、「おい、パンが来たので食えよ」と言ったが、黒パンを胸に抱きしめて死んでいった。亡くなった人を思うと本当に胸が詰まる。

8月15日（水）

15歳の志願兵の兄

鈴木　隆充さん（82歳）



1943（昭和18）年、海軍は全国の（旧制）中学校に予科練習生を強制的に割り当てた。兄がいた愛知一中には47名が割り当てられた。はじめは生徒たちの反応は冷ややかだった。志願者の少なさに焦った軍部は生徒を柔道場に集め、軍人たちが「時局講演会」を開いた。校長、配属将校が檄を飛ばし、「お国のために役に立ちたい」と使命感に目覚めた生徒たちは次々と志願を誓うという状況が生まれた。兄もその一人でした。父親は反対しました。他の生徒も親の反対などがあり、結局、愛知一中では兄を含めて13名の志願となった。兄、15歳の時でした。

兄は1945年5月、沖縄方面の海域で敵機と交戦し亡くなった。父に年60通もの手紙を送ってきました。検閲を回避した手紙では弱音を吐き、欲しいものをねだるなどのわがままを言っていたといいます。

名古屋空襲と戦後のくらし―澄谷三八子　7歳の戦争体験

9月11日（火）～　2階プチギャラリー

「戦争中熱田区に住んでいました。以前から空襲があり、すぐに行動できるよう、寝るときも服を着たままでした。焼夷弾の降る中、兄10歳、弟5歳、2歳の弟を背負った母と逃げました。炎はすぐ後ろに迫っていました」。7歳の時の空襲体験を語りつぐ澄谷三八子さん。その体験談を、語り手仲間の間瀬時江さんが絵にしました。

シリーズ 平和を守る仲間たち④　春日井の戦争を記録する会

1943年6月1日愛知県に2つの都市が誕生しています。陸軍造兵廠ができた春日井、海軍工廠が設置された豊川です。軍都として誕生した2つの都市は敗戦直前の8月7日（豊川）、8月14日（春日井）に米軍の空襲を受けます。豊川では県下空襲最大の2,600人以上の犠牲者が出ています。春日井ではあと21時間で戦争が終わるという時間に5トン爆弾による犠牲者が出ました。

「春日井の戦争を記録する会」は、こうした記録を後世に伝えるため、1986年に結成されました。戦争体験の聞き取り、現地見学会、子どもたちに語り継ぐ集い、春日井平和展などを他団体と協力して行ってきました。

こうした活動の中で、鳥居松と鷹来の陸軍造兵廠の詳細や春日井空襲の犠牲者名が明らかになりました。「あと1日早く戦争が終わっていれば家が焼かれることもなく、従業員と地元住民も犠牲にならなかったのに……」との声を聞き、敗戦前日8月14日の謎の空襲を追跡することになりました。国会図書館所蔵の米軍資料から、春日井に8月14日に投下した爆弾は「パンプキン」と呼ばれる模擬原爆だったこと、広島・長崎に原爆を投下した509混成群団が全国に49発の模擬原爆パンプキンを投下していたことを突き止めています。

（春日井の戦争を記録する会代表　金子　力）

鳥居松製造所慰霊碑 春日井市王子町

鷹来製造所記念碑 春日井市鷹来町

ボランティアの窓

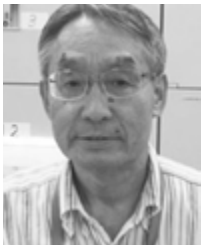
先輩たちに感謝を表現できないか……

井戸　早苗

11年目を迎えたボランティア。開館当時に出会い、今は「ピースあいち」を去った多くの人々から聞いた体験談を思い出す。現役兵を務め、三日間で人殺しができる兵士に改造するプログラム。中国で三日分しか食糧を持たされず、あとは現地調達、当然民家を襲うことになった戦略、むしろ一枚で順番待ちした従軍慰安婦との関わり、帰還船の甲板で、新兵いじめをした二人の古参兵が取り巻かれ、海に投げ込まれる場面を息を殺して見てしまった恐怖。しかし現役兵としては二年三か月のため、手当が支給されない不条理さも聞いた。受付を一緒にしながら、多くの事を残していった先輩たち。何か感謝を表現できないかなと考えるのだが…。

「戦争をなくす」ために何をしたらいいか

川越　敏行



昨年7月から活動に参加しました。参加して印象に残ったことのひとつを紹介します。案内係として館の2階で待機していると、おばあさんが声を掛けてきて、戦地（東南アジア）で亡くなった父親の「死亡告知書」を寄贈したいと言ってきました。その日は寄贈品を受け付ける日ではなかったので、詳しい話を聞くことはしませんでしたが、父親を戦地で亡くした悔しさ、憤り、そして、二度とこのようなことが起こってほしくないという思いが伝わってきて、強く印象に残りました。「戦争をなくす」ためには何をしたらいいのか、時々考えることがあります。当館のさまざまな活動は、これについてヒントを与えてくれるように思え、今後とも、積極的に活動に参加していきたいと思います。

資料館探訪 22

永井隆さんの療養の地、如己堂（にょこどう）

「こよなく晴れた青空をかなしと思うせつなさよ……」で始まる『長崎の鐘』は大流行し、人々を感涙させた。今でも歌い継がれている名歌である。この歌の元は永井隆博士（1908明治41年～1951昭和26年）が被爆の実態を書いた『長崎の鐘』である。

永井博士は白血病を患っていた。そのうえ被爆したので、命は長くないと思われていたが、放射線科の医師として全力を尽くして被爆者の治療にあたった。永井博士の家は原爆で焼失していた。1948年3月、病床に伏せた永井博士に近所の人たちが2畳一間の小さな木造の家を贈った。博士は「己の如く隣人を愛せよ」という聖書の言葉から「如己堂」と名付けた。博士は二人の子どもとここに住み執筆を続けた。

如己堂は70年の風雪に耐え、現在も残っている。ガラス越しにしか見えないが、その狭さには驚かされる。博士が亡くなった後、如己堂の横に永井隆記念館がつくられ、遺品や写真、直筆の書画などの資料が収められている。如己の気持ちがにじみでている資料館だ。（N）

月一回の発行で「ピースあいち」の活動がタイムリーにわかる「ピースあいち・メールマガジン（無料）」。「ピースあいち」のホームページからお申し込みください！

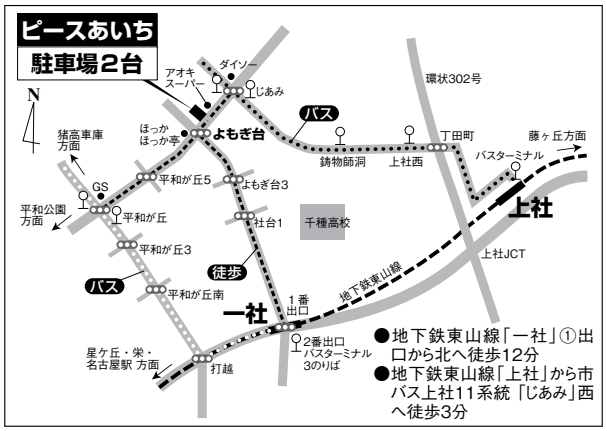
ぜひ「ピースあいち」の会員に！

「ピースあいち」は今年、2月の杉山千佐子追悼「名古屋空襲と戦傷者たち」を皮切りに、沖縄の『こころ』―追悼大田昌秀と儀間比呂志展、特別企画「高校生が描くヒロシマと丸木位里・俊「原爆の図」展や、高齢化による戦争体験者減少対応のための「語り継ぎ手の会」の立ち上げ等を実施してきました。

「ピースあいち」の基本財源は、入館料（大人300円・子ども100円）と会員の皆さんの年会費（正会員6000円・賛助会員3000円）です。来館者数は、開館した2007年は約12,000人、以後は6,000人前後で推移してきました。

現在会員数は915名（正会員379名・賛助会員536名）ですが、「ピースあいち」の年間経費約1千100万円には大きく足りません。不足分は不確定な寄付金や助成金に頼っているのが現状です。自主財源の確立は、まず会員の拡大です。ぜひ多くの方に会員になっていただき「ピースあいち」を支えてくださいますよう、お願い申し上げます。

■「ピースあいち」への交通のご案内



【ピースあいちの利用案内】

- ●開 館 日　火曜日～土曜日
- ●開館時間　午前11時～午後４時
- ●休 館 日　日曜日・月曜日・12月23日～2019年1月4日
- ●入 館 料　大人 300円　小中高生 100円
- ●常設展示「愛知県下の空襲」「戦争の全体像・15年戦争」「戦時下のくらし」「現代の戦争と平和」、準常設展示「戦争と動物たち」「戦争と子どもたち」。ほかに、図書や戦争体験DVDのライブラリーもあります。
- ●学校や団体の見学で、展示ガイドや体験談を希望される場合は、事前にご相談下さい。
- ●駐車場は2台分あります（300円）。他に障がい者用が1台分あります（無料）。

●編集後記●

近年、戦時遺品の当館への寄贈が相次いでいる。「祖父が残したものですが…」とか、「父が大切にしていたものです」という家族の言葉が添えられる。遺品の処分に当たって、「ピースあいち」に寄贈するようになったようだ。それぞれの家庭で世代交代があったと思われる。

この現象は、「ピースあいち」の知名度が高まったことを意味する。現在開催中の「第6回寄贈品展」の展示品は2017年6月から2018年6月までに27人の方から寄贈された戦時遺品154点を展示している。この中には、1941年から1945年まで克明につけられていた日記など貴重なものが含まれている。多くの方に見ていただきたい。（S）